

「調査圧」ってご存知ですか？

猛禽類は警戒心が強いいため、実は調査員自体を警戒し避けて行動します。これを私たちは『調査圧』と呼んでいます。調査圧を与えると、彼らの行動圏を正確に把握できず、事業による影響などを正しく評価できません。

私たちは、鷹匠から猛禽類の正常行動と異常行動を識別する技を学び、必要に応じ車内観察を行うなど、調査圧を与えないように配慮しています。



定点観察



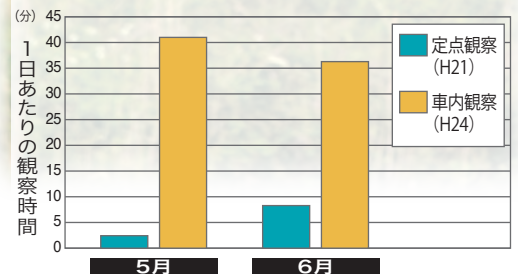
調査員が直接観察するので、できる限り目立たない服装で実施。

車内観察



調査員は車内から観察、さらにブラインドで人の気配を消すことで、調査圧を低減。

観察結果の比較



ある事業で、2つの手法でオジロワシを観察したところ、車内観察のほうが長時間観察でき、警戒心を抑えることが実証されました。

猛禽類と共に生きていくために行っていること

私たちは、猛禽類と共に生きていくために、開発などで失われたオオタカやハヤブサなどの営巣場所を創出するため、人工巣を製作・設置しています。また、利用状況をモニタリングし、必要な措置をとれるように、リアルタイムで映像を確認できるカメラの設置などにも取り組んでいます。



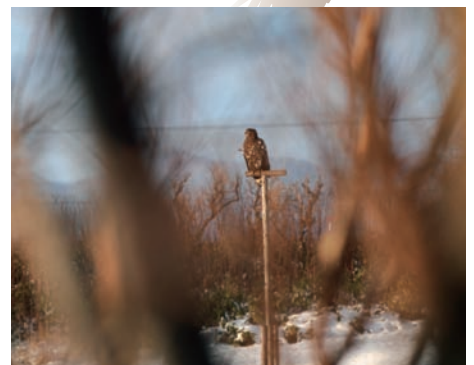
〈代替巣の設置〉

営巣環境や営巣木の条件を解析し、適地に人工巣を設置。これまでにオオタカ、ハヤブサの人工巣を製作・設置しました。



〈とまり防止ワイヤー設置〉

橋梁におけるロードキル対策として、とまり防止のためのワイヤーを設置。本数、間隔、張り具合で効果が異なります。



〈代替とまり木の設置〉

事業によってとまり木が失われたため、餌場の近くにとまり木を設置。目的に応じて高さ、太さ、向きなどを変えます。

新しい技術『馴化』に取り組んでいます

猛禽類の多くは適切に対応すれば、繁殖中であっても工事を続けることができます。私たちは、そのために『馴化』と呼ばれる手法を用いて、工事と繁殖の両立を実現しています。

工事を巣から遠い場所から始めたり、少しずつ作業時間や作業量を増やして、彼らの行動がいつもと変わったり、警戒している様子なら、作業を止めてスッと引く。こうした手順を繰り返すことで、自分たちのほうが優位な立場にいる、自分たちに害を与えるものではないと思わせ、徐々に工事に馴れさせるのです。

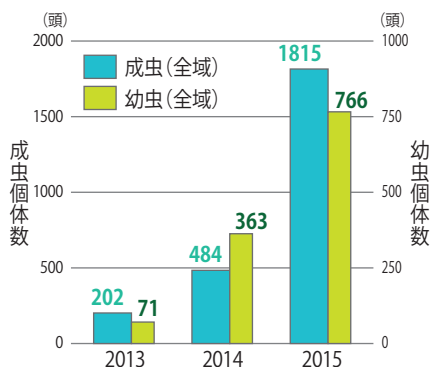
馴化への理解を深めていただくため、私たちは勉強会を開いたり、予行演習なども行っています。



人と自然との架け橋を目指して

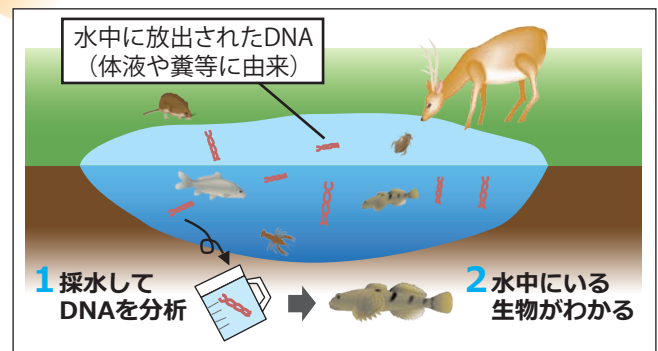
私たちは、北海道から本州の平地～山岳地に至るまで、あらゆるフィールドで調査を行っています。その内容は、大気環境、水環境、自然環境、景観など、さまざまな調査・分析・評価を行っています。そうした経験を通して、いつも感じることは、その地域の方々が身近な自然の希少さ、大切さに気が付いていないことです。このため、身近な生き物の存在や大切さを伝え、人と自然との架け橋となることも、私たちの重要な役割だと考えています。

希少なトンボの保全事例



湿地の池に生息する希少なトンボを保全するため、過年度の池の維持管理(かいぼり)の状況を整理し、その効果を分析しました。かいぼりする場所、時期、深さを見直すことで、個体数を劇的に回復させました。

環境DNAってご存知ですか?



池や川の水の中には、そこに生息する生物のDNAが含まれています。水中に含まれるDNAのことを『環境DNA』と呼び、水を分析するだけで生息している生物を推定することができます。生物に負担をかけず、かつ個体数の少ない種も見落とさない、こうした新たな技術にも取り組んでいます。